

2021年度 活動報告書



みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

目次

報告書の発刊に当たって(巻頭言)

事業報告

(企業との連携体制構築)

1. 企業とのコミュニケーションの体制づくり 1

(大学等連携事業)

2. 環境学習ツアーの開催 2

(1) 龍谷大学石倉ゼミ水島フィールドワーク

(2) 北九州市立大学三宅ゼミ水島フィールドワーク

(3) JICA 中国研修受入「水島フィールドワーク 瀬戸内海で学ぶ、産業と暮らしと環境」

3. 岡山大学実践型社会連携授業研修(9/17-19 岡山大学連携) 6

(1) 教養科目 倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境

(2) 水島タウンミーティング(9月17日)

4. 地元小・中・高・大学と連携した取り組み 10

(1) 倉敷古城池高校「通生海岸調査」を通じた、海岸調査体験プログラムづくり

(2) 小冊子「高校生と考える私のまちの防災-ジオラマ編-」印刷と配布

(生涯学習事業)

5. 水島学講座(観光編) 13

(地域連携事業)

6. 高梁川流域高校生活動交流会 15

7. 高梁川ミーティング((一社)高梁川流域学校連携) 16

(情報発信事業)

8. 情報発信 18

9. シンポジウムの開催 19

- 資料 28

- ・ 倉敷古城池高校 海岸生物調査結果 ポスター発表資料
- ・ 高梁川流域交流会ちらし
- ・ みずしま滞在型環境学習コンソーシアムについて

■報告書の発刊に当たって（巻頭言）

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

会長 萩原 邦章

持続可能な地域づくりを担う人材育成を目的に「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」を2018年3月に立ち上げ、4年が過ぎました。2020年に始まった新型コロナウイルスのパンデミックは、水島における環境学習の取り組みにも大きな影響を与えることとなりましたが、2021年度もオンラインの活用や感染者数の増減などを注視しながら、活動を継続・発展させてきました。

そういった中で、今年度は主に以下の活動を実施することができました。

1. 企業のCSR・SDGs活動に関するアンケート
2. 大学やJICA中国等の研修受け入れを地域の様々な主体と連携して実施
3. 地元の倉敷古城池高校を中心に高梁川流域の高校と連携した学びのプログラムづくりと交流活動
4. 水島地域の団体と連携した水島タウンミーティングの実施などまちづくりの取り組み
5. 水島学講座「観光編」の実施 など

2021年12月には、これらの活動の成果が評価され、「おかやまSDGsアワード2021（主催：おかやま円卓会議・おかやま地域発展協議体）」で「優良な取組」として、表彰を受けることができました。コンソーシアムの立ち上げから積み重ねてきた活動が、社会に評価され、今後さらなる発展のきっかけになるものとうれしく思っております。

今後は、今年度実施した企業向けアンケートを基に、企業との連携した取り組みを一層深めること、そして次世代を担う高校生や大学生といった若者の地域と一体となった活動を通じた学びの仕組みづくりをさらに進めていきたいと考えています。

着実に歩みは進んでいると思いますので、皆様のご協力をいただきながら、歩みをより強固なものにしていきたいと考えています。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

1.企業との連携体制構築

みずしま財団 塩飽敏史

2021 年度は、本分野では、水島をはじめとする高梁川流域の企業と地域が連携して、持続可能な地域づくりを進めるためのコミュニケーションの体制づくりとしてのアンケート調査を実施しました。また、おかやま円卓会議・おかやま地域発展協議体・おかやま SDGs 研究会が主催する「おかやま SDGs アワード 2021」にエントリーし、これまでの活動が評価され、「優良な取組」として表彰されました。

(1)企業の CSR・SDGs 活動に関するアンケートの実施

本アンケートは、各企業の CSR と SDGs 活動に関する情報を一元化して、見えるようにすることで、企業の情報を発信し、市民との交流の促進の一助となることを目的に実施しました。また、2016、2018 年に同様のアンケートを実施しており、その後の企業の活動の変化を把握することも目指しました。

水島地域における製造業を中心に 121 社にアンケートを送付(11/29)し、20 社より回答(回答率 17%)を得ました。アンケートの結果は、2 月 19 日に開催したシンポジウムで報告をしました(P20. 参照)。アンケートでは、後日ヒアリングに対応いただけるかという問いに対して、10 社が「ヒアリングを受けてもよい」と回答しており、次年度はヒアリングを実施するとともに、さらに企業との関係性を深める取り組みを進めていきます。

(2)おかやま SDGs アワード 2021

「おかやま SDGs アワード」とは、SDGs(持続可能な開発目標)を合い言葉として、優れた取り組みを表彰し、活動を後押しすることで、岡山に持続的発展のために挑戦をしていく人材が集まり活力あふれることを目指して、おかやま円卓会議・おかやま地域発展協議体・おかやま地域発展協議体・おかやま SDGs 研究会が主催するものです。

本コンソーシアムでは、これまでの活動を広く岡山県内に周知するとともに、同じく SDGs の実現を目指して活動する各種団体との情報交流・連携を深めるきっかけとすることを目的に応募しました。「持続可能な地域づくりを担う、若者の学びを支える仕組みづくり」と題した活動報告は、高く評価され、「優良な取組」の一つに選ばれ、12 月 4 日に開催された表彰式で表彰されました。

また、2022 年 1 月 27 日に開催された「みらいを、みんなで」高梁川流域 SDGs セミナー オンラインイベント(主催:倉敷市)で、倉敷市内で「優良な取組」に選ばれた 2 団体とともに、第 2 部パネルディスカッションに塩飽がパネラーとして登壇しました。



【表彰式の様子】



【オンラインイベントの様子】

(大学等連携事業)

2. 環境学習ツアーの開催

今年度は新型コロナウイルス感染拡大が落ち着いた 10 月に、3 件の大学生・留学生のフィールドワークを受け入れました。新型コロナウイルス感染拡大で若い人の学びが思うように実施できない中で、この水島フィールドワークは大変貴重な機会と受け取られていました。大学生のフィールドワークでは倉敷市環境監視センター職員が、普段なかなか見ることのできない監視システムを丁寧な解説とともに扉を開けて見せてくれ、熱心に学ぶ学生の姿がありました。

(1) 龍谷大学石倉ゼミ水島フィールドワーク

みずしま財団藤原園子

環境経済学、地域経済学がご専門の龍谷大学政策学部の石倉研先生が、ゼミの授業として 2021 年 10 月 21 日、水島フィールドワークに来られました。(17 名)

【目的】

コンビナートと隣り合うまちで、地域開発と暮らし、産業と環境の共存について話を聞き、持続可能な地域づくりについて考えを深める

【実施内容】

* 座学でのレクチャー(みずしま財団)

倉敷市水島地域の成り立ち 干拓、埋め立て、地域開発、新産業都市、公害の発生

水島の大気汚染と市民参加型調査

公害患者さんに寄り添ってきた医療従事者として、市民が自ら調べ、取り組んだ「あさがお調査」

公害裁判と、その後の環境再生への歩み

大気汚染公害裁判、水島再生プラン(1995 年作成)、みずしま財団設立と協働のまちづくり、患者さんの QOL 向上・呼吸リハビリの普及、環境教育活動、再生プランの見直し

* 昼食 水島商店街の中にある 4 か所に分かれて昼食(とらや、こころや、ときわ庵、ミルクラウン)

* 鷲羽山スカイライン水島展望台でのレクチャー「地域開発によるまちの変化」(みずしま財団)

工業地帯と住宅地の位置関係、公害発生の地理的要因、国立公園瀬戸内海の環境変化

* 見学とレクチャー(倉敷市環境学習センター・環境監視センター)大気汚染の歴史と環境監視の仕組み

* まちづくりの担い手ヒアリング (ミズシマ・パークマネジメント Lab.代表古川明氏)

私と水島、現在の活動、水島の未来について、質疑応答

* ふりかえり 感想を述べ合い、ふりかえり



(2)北九州市立大学三宅ゼミ水島フィールドワーク

みずしま財団藤原園子

南アジア地域研究, 環境社会学, 環境教育学がご専門の三宅博之先生が、ゼミの授業として 2021 年 10 月 25 日、水島フィールドワークに来られました。(8 名)

【目的】

コンビナートと隣り合うまちで、地域開発と暮らし、産業と環境の共存について話を聞き、持続可能な地域づくりについて考えを深める

【実施内容】

*座学でのレクチャー(みずしま財団)

倉敷市水島地域の成り立ち 干拓、埋め立て、地域開発、新産業都市、公害の発生

公害裁判と、その後の環境再生への歩み

大気汚染公害裁判、水島再生プラン(1995 年作成)、みずしま財団設立と協働のまちづくり、患者さんの QOL 向上・呼吸リハビリの普及、環境教育活動、再生プランの見直し

資料館づくりにむけて 学び合いながら、地域の価値を創っていく

*鷺羽山スカイライン水島展望台でのレクチャー「地域開発によるまちの変化」

工業地帯と住宅地の位置関係、公害発生の地理的要因

国立公園瀬戸内海の環境変化

*見学とレクチャー(倉敷市環境学習センター・環境監視センター)大気汚染の歴史と環境監視の仕組み、環境学習の現状

*まちづくりの担い手ヒアリング

(ミズシマ・パークマネジメント Lab.代表古川明氏)

私と水島、現在の活動、水島の未来について質疑応答

*ふりかえり 感想



(3)JICA 中国研修受入「水島フィールドワーク 瀬戸内海で学ぶ、産業と暮らしと環境」

みずしま財団塩飽敏史

11 月 27 日(土)岡山大学の環境生命科学研究科などで農業について研究を行う研修員 12 名と JICA 中国職員及び通訳の方が、倉敷市水島でフィールドワークを行いました。研修参加者の出身国は、アフガニスタン、インドネシア、マラウィ、マレーシア、ネパール、ケニア、ブラジル、コートジボアールと、非常に多様性に富んでいました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、来日がたびたび延期になり、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の解除を受けて、直前に来日した人がほとんどでした。

今回は、昨年度に引きつづき、2 回目となる研修で、「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」が企画運営を担い、水島地区を中心に高梁川流域、瀬戸内海における産業・暮らし・環境保護及び地域振興政策について、講義や見学を行いました。

まず、JR 岡山駅改札口に集合し、バスで移動しました。バスの中では、マスクをし、なるべく離れた座席に着席。最初の目的地である「水島展望台」に向かいました。

バスでの移動中および、展望台では塩飽が、江戸時代から続く水島の干拓、埋め立ての歴史と共に、地域開発と公害の歴史についてレクチャーしました。コンビナートと住宅地、農耕地が隣接している水島の特徴、また、北と東側を山に囲まれ、南西側が海に面しているため、海側からの風により、工場からの有害物質を含む排煙が滞留しやすい地理的・気象的特徴などを説明しました。経済発展も大事だが、それによってもたらされる負の影響についても考慮しながら開発を行う必要があるなど、水島の教訓を活かすことを訴えました。



【水島展望台での集合写真】

「高梁川流域における生きものと人々の暮らしの関わり」を学ぶ

その後、あさがお会館に移動し、田賀辰也氏(The INTERPRETERS)から、「高梁川流域の水辺の生物と人々の暮らし」と題したレクチャーを受けました。

田賀氏は、高校の生物教諭を退職後、様々なイベントなどで高梁川流域の生きものについて地域の人々、特に子どもたちに説明をするボランティア活動に熱心に取り組まれています。今回は、農業を主に研究されている研修員の方が対象ということで、高梁川流域の淡水魚を中心とした生きものの多様性とそれらの生きもののつながりについての解説がありました。そして、それら多様な生きものと人々の暮らしとの密接なつながりを説明するために、高梁川流域の伝統的な魚の取り方を例にお話をいただきました。



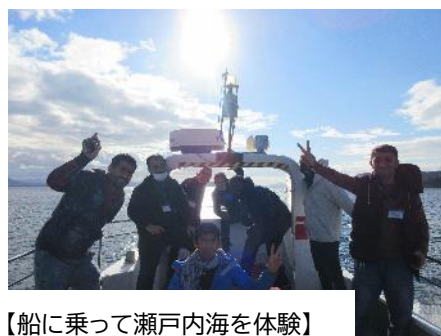
【アユの友釣り用の竿の重さを実感】

特に、伝統的な魚の取り方のお話しでは、持参された漁具を実際に触ってもらう体験や取れたアユやモクズガニに触れるなどさせていただき、研修員の皆さんは大変興味をひかれたようで、熱心にそして楽しそうにお話を聞き、体験していました。漁法の中には、海外でも同様の仕掛けを使っているところもあるということで、研修員の中には、母国と同様のものがあることに驚いた様子の方もいました。田賀先生のお話しは、生きものに対する熱い思い溢れており、同時に地理的な情報の中にご自宅を紹介するなど、とても親近感がわきやすく、研修員の皆さんはとても感銘を受けた様子でした。

児島観光港から、瀬戸内海周遊

昼食をはさんで、児島観光港から瀬戸大橋周遊観光船に乗りました。瀬戸大橋の下を通り抜け、与島の手前まで行き、児島観光港に戻る約45分間のクルーズでした。

船上では瀬戸内海の大小の島々や工業地帯を海から眺めることができました。クルーズ体験は、初めてという研修員もあり、瀬戸大橋の雄大さや多島美を誇る瀬戸内海の美しさに感動した様子でした。レクチャーを通して、過去の開発による水質悪化の問題、政府の規制強化により水質が改善した経緯、水質改善後も続く水産業の衰退の現状についても学んでいただきました。



【船に乗って瀬戸内海を体験】

「むかし下津井回船問屋」見学

最後に、「むかし下津井回船問屋」の見学を行いました。児島下津井地区は、古くから風待ち・潮待ちの港として発展して来た地域です。特に明治時代には、北前船による綿花、ニシン粕、昆布の中継取引港として大いに繁栄しました。当時の回船問屋の建物を復元した資料館で、日本の伝統文化に触れ、とても興味深く見入っていました。

「むかし下津井回船問屋」に隣接する地場の魚介類の干物を扱っているお店にも寄り、実際に干物を試食で味わったり、魚を回しながら乾燥させる機械を見学し、日本人の食文化についても、理解を深めた様子でした。



【むかし下津井回船問屋見学】

フィールドワークを終えて

フィールドワークでは、水島の経験を活かすことでSDGs(「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の達成を目指す取り組みを、現在水島で様々な主体と連携して進めていることを伝えることができました。参加者の皆さんが、研修を終えて母国に戻られたのち、水島での経験を思い出していただき、SDGs実現の一助になることを願っています。

3.岡山大学実践型社会連携授業

(1)教養科目 倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境

岡山大学地域総合研究センター・副センター長

岩淵 泰

はじめに

教養科目の「倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境」では、学部一年生を対象に、水島地区のまちづくりを題材にした地域課題の現状とまちづくりの実践を学ぶ授業を行っています。その特徴は、岡山大学の座学に合わせて、みずしま環境財団、商店街、まちづくり団体からの地域の現状を紹介してもらうことです。水島地区は日本有数のコンビナートを抱え、産業経済拠点として発展していますが、人口減少社会の中で、住民自身が住みやすいまちをどのように作っていくかを考えなければならなくなりました。学生たちは、集中講義への参加を通じて、その発展策や課題をまとめたレポートを提出します。

講義の視座

岩淵の専門は、政治学・市民参加のまちづくりです。まずは、「まちとは何だろう」という問いを学生たちに持ってもらいます。学部一年生はこれから専門を学んでいくので、地域に触れる経験を大切にしています。

本年度の集中講義は、熊本大学1名、新潟大学1名、本学学生9名の計11名が参加しました。対面とオンラインのハイブリッド型で授業をしました。対面での参加者は、5名でした。コロナ禍でも対面の授業を行いたいと、学生と地域の双方からお願いを受けました。三密対策を徹底し、オンラインを併用することで、授業を行うことにしました。このような実践的な授業は、準備に時間がかかります。昨年度も本年度も、地域のみなさんのお仕事が終わった後の夜のミーティングに何度も参加しました。また、岩淵が執筆した論文や新聞の原稿などを共通の資料として使うため、学生が地域に出かけるよりも、教員の準備が必要になります。

授業のカリキュラム

7月27日(火)に受講生とフィールドワークを行いました。水島商店街のまちあるきを行った後に、9月17日(金)のパーキングディの打ち合わせをしました。パーキングディは、アメリカ・サンフランシスコのまちづくり手法であり、道路を人間の活動空間に変えるイベントを行うものです。ポートランドのサウミヤ・キミ研究員から指導を受けてきました。まちあるきの後、古城池高校の学生も集まり、イベントの準備をしました。



しかし、8月、9月の緊急事態宣言のため、パーキングディを中止することにしました。その代わりに、地域課題やまちづくりを振り返る日を設定しました。岩淵の役割は、タウンミーティングというまちづくりを発表する場をコーディネートし、その内容に学生たちが発言する機会をつくりました。



9月16日(木)は、岡山大学にて、岩淵が市民参加の理論、みずしま財団から環境学習のまちづくりをレクチャーしました。9月17日(金)は、13時30から「タウンミーティングと住民自治(岩淵)」、14時から16時まで、「パーキングディと水島のまちづくり」、16時から17時まで、「おかみさんの会(商店街のお母さん方)」、17時30から19時まで、「タウンミーティング(倉敷市市議会議員、水島臨海鉄道、岩淵のゲスト)」では、学生たちが、コロナ禍で地域の発展策を議論しました。9月18日(土)9時30から11時まで、授業の振り返りを行いました。学生はレポートを提出し、評価を出します。

学生の感想によれば、オンラインと比べて、気を抜かず集中する時間が多かったそうです。そこに、大学らしさも感じたそうです。大変労力のかかる授業になるため、水島商店街のみなさんに多くのサポートを授業を行いました。

(2)水島タウンミーティング(9月17日)

ミズシマ・パークマネジメント Lab.代表理事 古川 明
(みずしま滞在型環境学習コンソーシアム副会長)

■参加者49名(オンライン参加者25名を含む)

2019 年の夏にスタートした「パーキングデー」、本来ならば、前年同様、水島商店街の中心部にある商業施設跡地で開催する予定でしたが、実施直前の緊急事態宣言発出により、急遽、「ミズシマ・パークマネジメント Lab.(以下、MPM)」の活動拠点にてタウンミーティングという形式に変え実施する運びとなりました。

突然の方向転換により、ミーティングの目的や、何処に焦点を定めた企画にするべきか、また、コロナ禍の状況下で、参加人数はどうするかなど、事前の擦り合わせとスケジュールリングに大わらわでしたが、何とか開催に漕ぎつけることができました。そして迎えた当日。参加者の紹介を兼ねた主催者の挨拶に始まり、最初のプログラムは、当日の会のテーマとなった「タウンミーティング」に関する岡山大学の岩淵准教授による講話でした。先生から、タウンミーティングが生まれた背景や歴史、本来の目的と意義など、新鮮な話題が次々に提供されたこともあって、参加者一同、熱心に耳を傾けている姿がとても印象的でした。



続いて、MPMの古川代表と田辺常務理事より、「水島の街づくりの現状」と「Park(ing)Day」の本来の目的や水島での実施状況などについて説明を受けたあと、ミズシマ盛りあげ隊の野呂副代表が、水島で毎年行われる「いすー I GP(グランプリ)」について、会場の笑いを誘うような秘話を交えた話があり、大いに盛り上がりました。

休憩の後は、おかみさん会の皆さんの登場です。往事の水島の写真をスクリーンに映しながら、当時を語って頂くという趣向で、写真一枚一枚に関する思い出や当時のエピソードの紹介を頂きましたが、現在の水島商店街からは想像もできない当時の街の賑わいには、ただただ愕然とするばかり、興奮覚めやらぬ間に時間は過ぎていきました。

そしていよいよ当日最後のプログラム「タウンミーティング」のはじまりです。岩淵先生のリードにより尾崎倉敷市議と水島臨海鉄道の佐々木主幹の対談形式で進められたシナリオの無いプログラムでしたが、市政に対する感想や議員の使命、水島の街づくりの話などについて熱く語って頂いたお蔭で会場から質問が飛び出すなど、盛り上がりを見せました。興の乗ってきたところで、後半では、会場の岡山大学の学生さんたちも対話に加わってもらうことになって、会場は、奇しくも「タウンミーティング」さながらの雰囲気…。冒頭、岩淵先生が説明くださった「タウンミーティング」の一端を最後に体感できる印象深い会となりました。

【当日の様子】



4. 地元小・中・高・大学と連携した取り組み

(1) 倉敷古城池高校「通生海岸調査」を通じた、海岸調査体験プログラムづくり

- ・講師(坂本明弘氏、洲脇清氏、田賀辰也氏、塩飽敏史)を派遣
- ・4/25、6/26、7/24、11/3、12/12、3/29 実施

倉敷古城池高校サイエンス部(元生物園芸部・科学部)及び探究学習の理系グループと連携して、体験型学習プログラムづくりを進めています。潮だまり部門、干潟部門、海ごみ部門の3つに分かれて調査する手法を1年間継続しました。潮汐表で調査日を決定し、調査指導は元高校生物教員3名に協力を求め、簡易調査シートを作成、活用しながら実施しています。調査結果は倉敷古城池高校が2月に開催したコンソーシアムシンポジウムで発表やポスター展示をしました。

2021年度の調査最終回には、倉敷古城池高校に加えて2校(倉敷南高校生物部、油木高校魅力化プロジェクトメンバー)が参加し、高梁川流域の上流域と下流域の高校生同士が対面して交流する貴重な機会となりました。その際、倉敷古城池高校生が調査方法の解説や、危険な生き物等の安全面の助言を行いました。1年間の継続調査を通じ、教えてもらう側から教える側へ成長する姿が見られ、高校生を対象とした体験プログラム実施する上で重要な知見が得られました。



左上:調査地点観察、左下:海ごみ部門
右上:潮だまり部門、右下:干潟部門

簡易調査シート

生物指標 (20 種類) 2021 古城池バージョン

* 観察できた生物は () にチェック

* 生物量に○を

シロスジフジツボ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 	ケガキ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 	マガキ 生物量 (10 5 1) 潮間帯全体 	カメノテ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 
タテジマフジツボ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 	マツバガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 	ムラサキガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯全体 	ヒザラガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 上部から中部 
クロフジツボ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部 	ヨメガカサ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 	ムラサキイソコ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 	イシゲ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部 
イボニシ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 	ウノアシガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部 	タテジマイソギンチャク 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 	ウミトラノオ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 
オオヘビガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 中部から下部 	アオガイ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 下部 	ヒジキ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 下部 	アナアオサ 生物量 (10 5 1) 潮間帯 下部 

(2)小冊子「高校生と考える私のまちの防災-ジオラマ編-」印刷と配布

2020 年にコロナ禍で活動が制限される中、倉敷古城池高校の生物園芸部(現サイエンス部)が高校のすぐ裏にある種松山の地形をジオラマとして作成しました。ジオラマとは、地形の模型の事です。これを使って 2020 年秋に倉敷市立福田公民館で地域の方と学び合った内容や、現地に行って確かめたこと、2020 年度のみずしま滞在型環境学習コンソーシアムシンポジウムで発表した内容を発展学習として記載した小冊子を制作しました。300 部印刷し、高梁川流域高校と水島地区中学校へ配布しています。

(A5 判 10 頁、発行:環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会・みずしま滞在型環境学習コンソーシアム)



(生涯学習事業)

5.水島学講座

水島について学び、水島を支える人材育成を目指す水島学講座の第 11・12 回目を開催しました。みずしま滞在型環境学習コンソーシアムが教育旅行としての体制を整えてきたことで、少しずつ水島を誘致する学校が増えてきましたが、水島は観光地として整備されていません。

水島に観光地としてのポテンシャルはあるのか、こうした点を考えるべく、今回は 2 人の方を講師にお招きしました。

第 11 回 産業観光と水島

日時:2022 年 1 月 29 日(土)14:00-16:00

場所:ミズシマ・パークマネジメント Lab.

講師:赤澤雅弘氏(玉島商工会議所産業観光アドバイザー)

赤澤氏は玉島を中心に産業観光ツアーの企画・コーディネートに携わってきた経験を踏まえて、水島の地域再生のための助言をお話いただきました。商店やものづくりの現場を回る赤澤氏のツアーは大変好評で、玉島のみならず周辺地域にも数多くの受け入れ先を持つに至っています。

何とも思っていなかった地元玉島を「いいまちですね」と言われたことで、赤澤氏はまち歩きを始め、商店街にある昔ながらのお店を見つめ直すようになったと言います。また、郷土史を調べたり古老に話を聞いたりする中で、ものづくりや商いの営みも含め、埋もれてしまったまちの物語を掘り起こすことが、地域を再生するヒントだと思い立ちます。

ツアーの参加者にとっては、地域でものづくりや商いに励む人々が普段の仕事について語る話は非常に新鮮であり、感動的でもあります。受け入れ先の人は、日頃の仕事の話に感動してくれる参加者を前にして、収益を得るだけでなく、仕事に対する誇りを取り戻していきます。他方で参加者も、共感者・応援者に深化していきます。常連客の顔が見えて来ることで、赤澤氏も新たなツアーの組み立てにつながっていきます。

赤澤氏は、産業観光を、観光による地域再生運動と位置づけています。ここでいう地域再生とは、観光客数を競って短期的に大きな経済効果を狙うのではなく、小さな経済効果をもたらしながらまちの物語を紡ぎ直し、住民が誇り・自信を取り戻していくことです。

水島に関しては、環境学習、教育旅行、コンビナート企業、工場夜景などすでに活用されている資源だけを深堀りするのではなく、街中の産業観光の資源も発掘していくことで、まちの価値がより深みをもつようになるのではないかという指摘もなされました。

第 12 回 観光を通じて地域の価値を高める

日時:2022 年 2 月 2 日(水)16:00-18:00

場所:ミズシマ・パークマネジメント Lab.

講師:小田切聡氏(株式会社 インプリージョン)

小田切氏は、約 20 年にわたる大阪での観光客受け入れに関わる旅行プランの企画や、自治体・観光施設・宿泊施設へのコンサルティングなどの経験を踏まえ、今後の観光まちづくりのあり方についてお話しいただきました。

観光をめぐる状況は大きな変化を迎えています。かつては単なる物見遊山でも多くの集客が可能でした。しかし、移動時間が短くなったり、情報が得やすくなったことで、以前のような構えでは、人はすぐに飽きてしまい、新しい場所へ向かってしまいます。都市のインバウンド戦略の成功は、やがて地域の疲弊を招いてしまいました。コロナ禍もあって、ニューノーマルという言葉も使われてきています。

小田切氏は、これからは1回限りの訪問で終わらない「地域のファン」を増やし、細く長い関係を築くことが重要だと言います。ファンを増やすためには自然や文化、食を体験してもらうだけでなく、それらと紐づいた地域の「暮らし」と「営み」、それを支える「人」について学んでもらい、共感を得ることが必要です。「人」は、特別な人である必要は無く、地域の暮らしやその魅力を語ることが出来る人であれば誰でも可能性があります。

したがって、地域の人と外部の人が一緒に時間を過ごして交流するのが重要になりますが、「暮らし」や「営み」、「人」をきちんと見てもらうためには、両者を仲介するコーディネーターが必要になります。コーディネーターには地域の歴史ひたすら勉強して面白く語ることより、むしろ対人スキルが求められます。この他、SNSなどのメディアによる発信の工夫も不可欠です。

さらに、こうした着地型観光はあくまで手段であること、何を目指して取り組まなければならないのかという目的について組織、地域で合意を取ることの重要性も強調されました。

いずれの講演も大変興味深いものでした。地域再生は、大幅な資本投下をせずとも、身近にある人・モノで構想できるという点など、共通する視座が含まれていたようにも思います。その意味で、参加者にとっては、これからの水島の再生の道筋をめぐって想像を膨らませる機会になったように思います。

6. 高梁川流域高校生活動交流会

高梁川流域で活動する高校生が情報の共有、交流することによって、『高梁川流域』というつながりを意識するとともに、生徒が相互に刺激を与え、それぞれの活動を活性化させる場としました。岡山大学実践型社会連携事業(協力みずしま滞在型環境学習コンソーシアム)で学んだ学生がコメンテーターとして参加し、高校生の活動にコメントすることで、若い世代のつながりを広げるとともに、人材育成の一環となりました。

2021年11月7日に、「つながり」テーマに、オンラインで実施しました。広島県神石高原町で高校の魅力化の活動をしている伊藤博暁氏との連携で広島県立油木高校が参加され、岡山県立倉敷南高校、岡山県立倉敷古城池高校、金光学園高校の高校生22名が参加しました。

(主催:みずしま滞在型環境学習コンソーシアム、共催 NPO 法人 nina 神石高原)

まずはグループ(ブレイクアウトルーム)に分かれ、自己紹介をして交流、その後、学校の活動報告をしました。倉敷古城池高校からの高梁川が注ぎ込む海辺での生き物調査や海ごみ調査の報告を聞いた参加者から「私も参加したい!」「次の日程教えて」の声が聞こえてきました。



滞在型環境学習の「海辺のプログラム」として、地域外から学びに来る人にも提供できないか?と考えているところ、まさしくこれを実現できる日も近そうです!高梁川流域地図が画面に映し出され、自分の位置を知る、ことをできたのもよかったです。

7.高梁川ミーティング((一社)高梁川流域学校連携)

高梁川流域学校理事 古川 明

高梁川流域各地で活動をしている団体や組織の活動状況を互いに紹介しながら、互いの連携強化の道を探ることを目的に始まった同ミーティングが、ミズシマ・パークマネジメント Lab.にて、3年ぶりに開催されることになりました。コロナ禍の影響もあり、会場参加者の定員は20名に絞り、オンライン参加も可能とするハイブリッド形式で開催する運びとなりました。参加者23名(内4名オンライン参加)。

プログラムは、水島の街に出て、街の課題を見つけ、その解決策を探ろうとする古城池高校の総合的探究授業の活動報告を軸に、それぞれの活動に関わりのある組織団体から関連する活動報告を頂くという構成です。(プログラムは、添付の通り)

当日は、古城池高校から、5つの活動報告を受けた後、水島地域環境再生財団の塩飽さんより、滞在型環境学習コンソーシアムを中心とした話題提供が、続いて、水島こども食堂ミソラ♪の井上さんより最近の活動状況のお話を、続いて、水島通船の宗田さんから、通船さんの業務内容についてわかりやすく紹介頂いた後、最後にミズシマ・パークマネジメント Lab.の田辺さんから、組織の概要や、現在、取り組んでいる活動の紹介が行われましたが、それぞれの報告の後には、活発な質疑応答もあって、終始、熱気に満ち満ちた時間となりました。

また、高校生達の発表は、県内外のコンテストで、受賞を重ねてきただけあって、プレゼンテーションのレベルも高く、参加者から多くの称賛を得ました。また、会終盤には、県外から帰省中の古城池高校OGから、大学生になってからの貴重な経験を通じ学んだことを、後輩たちに向けて熱く語ってくれる場面もあって、参加者一同、大いに心揺さぶられる一幕もあり、半日の充実したミーティングは無事、終了となりました。







8. 情報発信

今年度の情報発信事業は、既存ホームページの活用、みずしまスタイル 11 号に、記事を掲載しました。
(環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会発行)

今年度は、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)から、「学びの共同体構築事業」から依頼があり、ヒアリングに対応しました。

9. シンポジウム「持続可能な水島をみんなで作る」開催報告

(1)開催概要

日時:2022 年 2 月 19 日(土)13:30-16:30

場所:水島愛あいサロンコミュニティフロア A~D

参加者: 60 名 (オンライン参加者 30 名含む)

プログラム:

開会あいさつ:古川明氏 (みずしま滞在型環境学習コンソーシアム副会長)

活動報告 企業の CSR・SDGs活動に関するアンケートのまとめ

報告者:塩飽敏史氏 ((公財)みずしま財団)

助言者:吉田淳一氏 (萩原工業株式会社)

基調講演 持続可能な地域づくりに向けて

講師 :三村聡氏 (岡山大学地域総合研究センター)

パネルディスカッション 若者と考える学びを通じた持続可能な地域づくり

コーディネーター:三村聡氏

パネリスト

岡山県立倉敷古城池高等学校 住井琉真氏、名越元春氏

佐々木聡氏 (水島まちづくり協議会)

中平徹也氏 (環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会)

三宅康裕氏 (倉敷市企画経営室)

主催:みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

(2)当日の内容(敬称略)

【開会挨拶】

古川明:寒い中、またお足元の悪い中、ご参加ありがとうございます。みずしま滞在型環境学習コンソーシアムも来月で 4 年を迎えます。ここまで活動が進められてきたのも、それぞれの活動を支えてくださった方のご尽力のたまものだと思っています。特にこの 2 年間はコロナ禍もあって、悩み苦しむ場面も多々ありましたが、リモートワークを駆使する中でむしろ活動の幅や深まりが生まれてきたようにさえ感じています。

本日は古城池高校の生徒さんにも参加していただいています。これまでの古城池高校の皆さんの活動は、全国に、「岡山に古城池あり」と発信して下さったという意味でも非常に心強いものでした。こうした活動に関係する方々の支えにより発展させ、本コンソーシアムのさらなる活性化を図っていければと思います。本日は、これから様々な活動の紹介がありますが、それらを通じて、持続可能な水島の街づくりにつながっていく 1 つの道筋を描けたらと思いますので、どうぞ熱く、真摯なご議論をお願いいたします。

【挨拶】

伊東香織(倉敷市長)

シンポジウムの開催、大変におめでとうございます。取り組みにご尽力いただいている産業界、大学、

高校、中学校、学識関係者、地域の皆さま方に心から感謝を申し上げます。

倉敷市の持続可能な取り組みは、今から約 70 年前の高梁川流域連盟にさかのぼることが出来ます。上流の人は水を綺麗にして下流に流す、下流の人は上流に木を植えたりゴミを拾って水を守っていくという形で、水の恵みを共有する営みはずっと行われていました。そうした中から、環境学習というものを作っていただいていると思います。

このコンソーシアムの大きなポイントは、若者も含め地域の皆さんが持続可能性という考え方を自ら体感・体現し、将来に繋げていくことだと思っています。倉敷市も一昨年には SDGs 未来都市という資格を取り、翌年 6 月にはゼロカーボンシティも表明しております。色々なことに皆さんで取り組んでいくことによって実現をしていきたいと思っています。シンポジウムが意義深いものになりますことを祈り、挨拶とさせていただきます。

【活動報告】企業の CSR・SDGs活動に関するアンケートのまとめ

塩飽敏史：今年度、コンソーシアムは企業とのコミュニケーションの体制づくりの一環として、CSR・SDGs 活動に関する企業アンケートを実施しました。これは 2018 年にも 1 度実施しており、今回は以前の結果との比較も少し含めながらお話ししたいと思います。

アンケートは水島地域における製造業 121 社に発送しており、うち 20 社より回答をいただきました。質問項目は大きく分けて、①CSR(SDGs)活動としての取り組み、②環境対策としての技術開発、③環境学習や SDGs 学習としての取り組み、④2018 年以降の取り組みの変化、の 4 区分です。



①CSR(SDGs)活動としての取り組み

20 社のうち、11 社が企業内での普及啓発活動や地域でのボランティア活動を行っていると回答しており、うち 9 社が CSR・SDGs 活動を進めるための担当者を置いています。

また、19 社が SDGs を企業理念や経営方針に反映することに「取り組んでいる」か、「検討を予定」しています。私募債発行時の手数料の1部を高校に寄付する取り組みがあることなどもわかりました。

②環境対策と技術開発状況について

9 社が全社方針としても水島事業所としても取り組んでいる、あるいは水島独自の技術開発に取り組んでいます。具体的な中身はプラスチックのリサイクル技術の開発や、業界団体から認定された環境調和認定製品の提供、健康経営の推進などがあります。

③環境学習や SDGs 学習以外での取り組み

水島・高梁川流域・瀬戸内海での取り組みとして、ゴミ拾い、清掃活動、お祭りや自治会のイベントへの参加があることがわかりました。

また、日本全国や海外に向けた取り組みとしては、モノづくり技術や会社の諸活動を紹介する地域イベントへの参加のほか、農業による食料供給への貢献という回答があり、重化学工業に限らない、水島コンビナート企業の多様性も見えてきました。

工場見学は、半数の企業が受け入れています。自治体・地域住民が対象となる工場見学も実施されており、こうしたところから地域とのつながりも見えてくると思います。

インターンシップは 5 社が受け入れており、2 社が「今後検討の予定」と回答しています。内容としては、業務について学んでもらうというのが主で、倉敷芸術科学大学や水島工業高校などと連携しているところも見られます。

④2018 年以降の取り組みの変化

5 社が「変化がある」と回答しており、「本業に SDGs を位置づけるようになった」という声もあります。ただしこの変化は、すでに取り組んでいた状態から少ししか変わっていない可能性もあり、企業にどれほど SDGs が浸透しているのかは分析が必要です。

②に関して「反映している」と回答した企業は 1 社から 10 社に、「今後検討の予定」は 6 社から 9 社に増えており、社会貢献を企業の本業に据えていく動きが広がっていると思われます。今後、工場見学、インターンの受け入れの拡充等を目指して、企業との連携をより一層深めていきたいと思います。

【コメント】

吉田淳一：水島の企業に勤めている立場から、SDGs をどう考えているのか、考えるべきかという点を中心にお話したいと思います。

そもそも企業が社会に関わるということについては、30 年前ほど前にメセナが出てきました。これは主に、企業が利益の中から社会に役立つようなことに寄付をするようなことを指しており、任意の取り組みとされていました。他方で、CSR(Corporate Social Responsibility)は、企業の社会貢献は責任であるという考えを反映した言葉として出てきました。さらに、この CSR の延長線上に SDGs(Sustainable Development Goals)が出てきています。

CSR と SDGs はどう違うのかということが企業の中でもよく言われました。一般的には、CSR は本業で頑張った上でプラスアルファの社会貢献であるのに対して、SDGs は本業そのものを通じた社会貢献です。先ほどのアンケートの結果は、前者から後者への転換を示していると思います。

SDGs とは別に ESG(Environment, Society, Governance)というものもあります。企業からすれば、SDGs は意識が高い企業が取り組むものだという受け止めでした。しかし、ESG は、責任というより義務に近いものになります。義務を果たさないと、株の発行や銀行からの借入れができないことがあります。

企業からすれば、この ESG をやらざるを得ない状況で、SDGs を位置づけているのが本音だろうと思います。E の環境は、自動車会社で言えば排気ガスを出さない車を作ることです。S の社会にあたるのは、先ほどもありました工場見学やインターンシップなどです。

水島にはすぐ近くにコンビナートがあるわけですが、地域としてはここいかに仲良くやっていくのかという課題があると思います。その時に考えなければならないことは、水島に立地する企業が ESG、あるいは SDGs をどのように本業に入れ込もうとしているのか、そこに関係する地域活動は何かということではないかと思います。

一例として弊社の取り組みを紹介させていただきます。萩原工業は主にブルーシートを作っています。今までは、ブルーシートは何にでも使えますよとアピールしていました。現在は、災害が起きた時にどう使ってもらえるかを意識しています。

災害が起きた時の今までのやり方は、ブルーシートを「しっかり供給する」ことでした。真備町の水害の



時には市役所に寄付もさせていただきました。現在は、災害から復興していく中で使いやすい形や大きさを意識して加工するという意味で、製品開発に SDGs の考え方を取り入れています。

【基調講演】持続可能な地域づくりに向けて

三村聡：今回の大きなテーマは環境学習となっていますが、ここでいう環境は水島、高梁川流域、瀬戸内海も含めた広い意味での環境のことであり、私たちの暮らしそのもののことです。それをどのような形で持続可能にしていくのかということを考えたいと思います。

水島には、産業が発展しなければ持続可能な社会はできないと考えられていた経済成長最優先の時代にあって、そこに住む人が痛みを抱えてはいけないという問題提起を、公害訴訟を通じて行ってきた歴史があります。かつての環境政策は、企業側がコストの負担をしながらも企業の本業とは外れた「対策」として位置づけられ実施されてきた側面が否めない時代が続いてきたといえましょう。現在はパリ協定や COP10 など、地球環境の持続可能性を考えなければならず、個々の企業が儲かればよいというのをよしとしない世界になってきています。

さらに企業が SDGs を具体的に本業に取り入れていく上で、ESG 投資が世界の潮流になっています。これは、地球の持続可能性を探るために頑張っている企業への投資です。日本もこの流れに追いつこうと一生懸命です。地球を持続可能にして次世代、孫の世代に手渡していくために、地域のあらゆる企業が ESG 経営を遵守する必要があります。さらに現在は企業だけでなく、産官学含めて皆が SDGs を共通言語にして持続可能性を考える時代になっているのです。



産官学金言による議論の場

今日はそうした観点から、岡山大学の取り組みについて紹介します。地域総合研究センターは、社会から見て大学の敷居が高いとの県民の声を受け、10 年前に設立された組織です。現在は「実りの学都」、「SDGs 大学経営」をキーワードに取り組んでいます。

2016 年に、地域総合研究センターが事務局を務める形で「産官学金言」（金：金融機関・言：メディア）の連携組織である「おかやま地域発展協議体」が出来ました。また、地域の課題を話し合い、その解決策を熟議すべく、山陽新聞社、岡山県商工会議所連合会、一般社団法人岡山経済同友会、岡山県知事、岡山市長、倉敷市長、岡山県銀行協会会長、岡山大学長などオール岡山のトップで構成される「おかやま円卓会議」も作り、知恵を出し合いながら活動を続けています。

さらに、金沢大学・熊本大学と一緒に、まちづくりシンポジウムを行っています。これは毎年持ち回りで開催するものであり、市役所や地元の商店街とも協力してまちの課題を考えることを目的としています。

グローバルな観点からの取り組み

EU 議会が置かれているフランス・ストラスブールの市長や大学の学長、アメリカ・ポートランドから研究者を招聘するなど、持続可能な社会に向けて世界から若者が集う学びの都としての「学都」を創り上げようと様々な機会を設けてきました。

またスポーツの分野では、東京オリンピックに際し、岡山シーガルズがタイ王国バレーボール協会と協定を結び、事前強化キャンプの岡山誘致を行いました。シーガルズは親善大使として岡山県のいい商品を ASEAN に売り込み、タイのチームには福田公園体育館での V リーグ公式戦の観戦や倉敷市美

観地区での観光を体験してもらい非常に好評でした。

地域課題の解決へ

岡山県には後楽園や岡山城があるのに、そこを回る観光者向けの周遊バスがありませんでした。それにかかわる議論を行うためにモビリティ研究会を開催、その結果、運賃 100 円で乗車できる「後楽園バス」の運行を実現することができました。

また、私自身、真備町の復興計画の策定委員長をさせていただいています。真備町へは、発災直後、約1カ月間、学生を毎日ボランティアに参加させていただくこともありました。

行政への支援

倉敷市は令和 3 年から 10 年間にわたる第七次総合計画を策定しました。その中には、5 年計画の倉敷みらい創生戦略が位置づけられています。さらに、高梁川流域(7 市 3 町)全体のまちづくりのビジョン、倉敷市全体の防災計画と真備地区復興計画が包摂されています。岡山大学は第七次総合計画を策定するための審議に関わっており、復興計画の策定・推進の支援も行っています。

地域との連携によってつくる学びの場

岡山大学は地域と連携することで多様な学びの場をつくっています。

まず、高校生が人生の大先輩から貴重な経験や知恵をヒアリングさせて頂き後世に伝えようとする「聞き書き」活動を支援しています。

また、高梁川流域の里山暮らしから水島の先端環境技術まで、地域の歴史を 100 年スパンで学べるような小中学生向けの教材づくりも支援しています。さらに、「干拓から生まれた水島」「農業から工業への転換」などをキーワードに、水島の魅力を発見できるように、まちの歴史を整理したり、21 世紀のまちのあり方を考えています。

ニシナ本店の駐車場を活用し、パーキングデイというグローバルな取り組みを水島版として展開する取り組みも行っています。

これらの他、コンビニート企業の技術や環境対策、商店街の成り立ちについて聞く機会を設けたり、水島港ナイトクルーズ、商店街活性化のためのワークショップも実施しています。

我々はどこからきて、現在何をしようとしているのか、そして、これからどこに向かおうとしているのか。水島はそれを考え学ぶことができる環境学習の素地を十分に備えています。水島版 SDGs は、ローカルな話だけに終わらず、世界に発信できるものになると考えています。

【パネルディスカッション】若者と考える学びを通じた持続可能な地域づくり

三村：まず、岡山県立古城池高等学校のみなさんに研究発表をしていただきます。

研究発表：干潟にハマって考えた

古城池高校生物部：授業をきっかけに生物多様性に興味をもつようになり、近くに海岸があるから実際に調査をやってみようということになりました。調査場所は児島の通生海岸です。ここは岩場と砂地



が広がっており、ゴミと生物の調査を1度にすることができます。

まず、生物分野について報告します。主に砂の中や岩の隙間に潜む生物たちを探しました。水が綺麗な場所でしか生きられないケガキのほか、フジツボ、ヒザラガイやカメノテなど、岩にくっついて生活する生物たちが見られました。また、干潮時の潮だまりには、ムラサキカイメン、オオヘビガイ、タテジマイソギンチャクなどが取り残されていました。しかし、そこからわずか数十メートルしか離れていない干潟には、アナジャコ、棲管(せいかん)など、まったく違う生物たちが生活していました。

水質と生物の状態を調べたところ、水質は標準より少し上で、かつ非常に多様な生物がいることが分かりました。

生物調査と並行して、昨年3月からゴミの調査も行いました。調査項目は3つあります。1つ目は漂着ゴミです。収集した漂着ゴミ275種類中、半分が発泡スチロールでした。これは漁業に使われることが多いですが衝撃に弱いため、ビーズが剥離することで海洋汚染につながってしまいます。漁業に関するゴミの他、陸からのゴミが多いこともわかりました。

2つ目は、マイクロプラスチックです。これは直径5mm以下の小さなプラスチック粒子のことを指します。50cm×50cmのエリアの中で、表面から1cm程度掘って調べました。これは、主に発泡スチロール、人工芝のかけら、レジンペレットなど、プラスチック製品に加工される原料が原因です。

3つ目に、マイクロプラスチックの比重です。淡水・人工海水に沈めてみると、調べたもの全てがいずれの水にも浮きました。しかし、レジンペレットだけが人工海水にゆっくり浮きました。いずれにしても、マイクロプラスチックは海岸に流れ着いたと考えられます。

気になったのは農業用肥料です。調べたところ、これが原因となるマイクロプラスチックの採取量は月によって差が大きく、6月と9月に多いです。私たちは、稲作の肥料に含まれるプラスチックが台風や大雨によって溶け出したのではないかと考えました。私たちは環境負荷の低減のため、自然分解される硫黄コーティング肥料を普及させることが大事だと考えています。

三村:ありがとうございます。他の皆さまも、自己紹介も含めて若干の活動報告をお願いいたします。

佐々木聡:佐々木と申します。昨年11月にまちづくり協議会が設立されて以後、事務局として趣旨説明や諸々の環境整備をさせていただいております。

水島が抱える問題というのは世界各国・地域と共通するところがあると思います。SDGsをベースにまちの社会的課題を洗い出し、それを解決していくことがまちの価値の向上につながるという考えのもと、実際にそれに取り組む共同ネットワークとして作ったのがこの協議会です。

私1人の考えではなく、事前にまちの社会的課題の解決に志を抱く人たちに声をかけてワーキングを開催し、事業アイデアを作っています。

私が一番重視しているのは組織の中に設けている「部会」です。これは、部会長の承認があれば、水島内外を問わず誰でも入ることができることにしております。今年に入ってから「人とエネルギーの地域ハブ創出部会」(仮)を立ち上げました。これは、環境、社会、経済の統合的発展を目指して再生エネルギーの普及基盤を作ること、地域経済循環と雇用の創出を目的としています。



重視したいのは合意形成です。再生エネルギーの取り組みをしても環境が破壊される場合があります。加えて、なぜ再生エネルギーに取り組むのか、気候変動問題も含めて皆さんできちんと勉強する必要があります。認識を合わせ、地域で1つになって進めていきたいと考えています。ぜひ多くの方に参加していただきたいです。

中平徹也：中平です。環境学習を通じたまちづくりと人材育成を考える協議会の座長を務めています。この協議会では多様な主体が手を取り合って環境学習を通じた人材育成のまちづくりをしていくことを目指しています。

塩飽さんとみずしま財団理事の山本幸子さんと一緒に水島小学校で行った出前講座の事例をお話します。まず水島の成り立ちと公害の歴史をDVDで学び、公害患者を診てきた病院のお話として山本さんから話しいただきました。その後、生徒には、2030年はこんな水島だったらいいねというアイデアを出してもらい、そのために自分たちに何ができるかも考えてもらいました。



また、古城池高校の皆さんと公民館が連携し、ジオラマを使いながら防災のまちづくりについて考える講座を、協議会として主催しました。さらに、昨年夏には古城池高校の皆さんと真庭市に行き、現地の高校生と一緒に交流・ワークショップも行いました。感想を見ると、自分たちがどうしたらいいのか、ということに関する気づきが得られたようです。

環境学習はすぐに世間を変えるわけではありません。すぐに実にはつきませんが、だからと言って諦めるのではなく、種を巻き、水を与えていきたいです。上の世代が若い世代に何を伝えていくかが大事だと思っています。

三宅康裕：倉敷市では大原總一郎さんが提唱されたように、流域の市町のことを考えて仕事をするという方向性を職員としても常々共有してきました。

実施している主な事業ですが、まず、流域圏でSDGsに向けた活動が可能な団体に登録してもらうことで、仲間を増やすことを目的とする制度を置いています。言わば、ゆるいパートナーシップです。



その上で、実際にSDGsに取り組む人を育てるための高梁川志塾があります。これは、高梁川流域学校さんに運営していただいているのですが、座学・フィールドワーク・メンタリングも含めた実践型人材教育です。

さらに、今年度からは山陽新聞社や中国銀行、クラウドファンディングで有名なREADYFORからなる「晴れ！フレ！岡山」とも連携し、市内でのSDGsに関連する事業のお手伝いもさせていただいています。

最後ですが、倉敷市では高梁川流域学校のほか、高校生を対象とした未来育成人材事業、大学連携推進事業含め、様々な人の課題解決をお手伝いするような各種人材育成事業を多く備えています。

三村：ありがとうございます。高校生の皆さん、お話を聞いてみて感想などはありますか。

住井：企業の方や大学の先生のお話も含めて伺っていく中で、未来のことをもっと考えて普段の研究も頑張っていきたいと思いました。

名越：私たちが知らないところでたくさんの取り組みが行われていることにとても関心を持ちました。

三村：ありがとうございます。それでは、佐々木さん、中平さん、三宅さんに少し聞いてみたいと思います。特に、古城池高校との連携です。三宅さんは県立高校のような、教育委員会の所管になる学校との連携はどう考えられますか。

三宅：教育委員会と協力して小中学校に繋ぐことはよく行っておりますし、水島コンビナートの環境学習の教材を共同で作ったこともあります。ただ、切り口によって担当部署が異なります。未来人材育成事業は商工課や労働政策課(産業セクター)担当ですが、そこに教育委員会が切り込むのは難しいです。対応ができる部署に仕事を振ることが大事だと思います。

三村：中平さん、いかがでしょうか。

中平：高校生たちには、しっかり学んで自分のものにするだけでなく、学んだことを小中学生に伝えてほしいです。それをしていく上で必要であれば、私たちの連携をうまく使っていただきたいです。

三村：出前講座をされるとき、教育委員会や校長先生との調整など、苦労はありますか。

中平：かつてはありましたが、市との協力関係をお伝えしたり、プログラムの見える化などを通じて少しずつ自分たちのことを理解してもらえるようになりました。ただ、今の小中学校の教員はかなり多忙で、理解してもらえても…というところがあります。

三宅：市でも市民学習講座として出前講座を持っています。すべてを市が受け持つのは難しいため、高梁川流域学校の卒業生の方などに講師をお願いすることもあります。お声がけいただければ、必要などころにお繋ぎすることは可能だと思います。

三村：佐々木さん、いかがでしょうか。

佐々木：ある取り組みに共感・後押しをしてもらうにはストーリーが大事だと思います。特に、私と若手の皆さんでは訴える時の破壊力が格段に違います。「なぜやらないんですか」「なぜ社会は実現しようとしなのか」という問いかけを、研究を通じて行っていただきたい。そこで大人も触発されて 1 つの目的に向かって走り出せればと思います。ストーリーは大人が交えて作ってもいいと思いますし、そこに協力したいとも思っています。

三村：ありがとうございます。高校生の方、何かご意見はありますか。

住井：私たちは干潟を調査しているのですが、現在、ますます干潟が減っています。干潟にしか生きられない生物もいるし、干潟によって海の栄養バランスが保たれている面もあるので、やはり大人の方には干潟を守っていただきたいです。そのための啓発も頑張りたいです。



名越：私が色々な活動ができるのは、先生、みずしま財団の方々などの連携があるからです。ポーリング調査をしたり、マイクロプラスチックの知識を得たり、とても充実した学びが出来ていると思います。

三村：中平さんは、こうした活動はかなりベテランだと思いますが、どうでしょうか。

中平：これからの時代は先が見えないし、経験したことが無いようなことが起こってきます。その時に、どれだけ力をつけているのかが問われてきます。勉強し、様々な形で人に伝えていただきたいと思います。私の中では、今お話いただいた2人は、既に先生です。



三村：色々な取り組みのお話がありましたが、持続可能な社会の実現には工場だけでも、行政のリーダーシップだけでも不十分で、市民協働を自走させていかなければいけません。そうした観点も含め、3人の方に今後の決意などをお聞かせ願えればと思います。

三宅：環境学習をいくらやるといっても、それをどう事業化するかなど、お金の話がつきまとってきます。これから未来を生きていく学生の方には、ビジョンを実現していく手段も身に付けてもらえると、よりいいのではないかと考えています。

中平：環境学習の持続可能性はお金の面だけではなく、種を植える人、花を咲かせる人、花からまた種を拾う人がいて成り立つものでもあると思います。この地道な作業を重視して頑張りたいと思います。

佐々木：持続可能性は世代交代と不可分だと思っています。できたばかりの協議会ではありますが、私は「生む」という1つの役目を終えました。これが世代を超えて持続してほしいと思っています。今日お話しした部会には高校生も含めて幅広く加わっていただき、実現に向けて頑張りたいと思います。

【閉会のあいさつ】

古川：真摯なご議論をありがとうございました。持続可能性を実現していくには、やはり人と人の心と心のつながりが欠かせないと私は受け止めています。その為には、人から人に伝えていくコミュニケーション能力の向上や、それを補完するためのツールの活用技術なども含めたスキルアップが必要です。今後共、以上を念頭に置きつつ、時間軸を繋ぐ人財を育てていくこと、そして人と人の輪を広げていく水平展開を図っていくことを、意識しながら、縦糸と横糸で布を織りなすような活動を展開していけたらと思います。

引き続き、皆さま方のご支援を宜しくお願い致します。

本日は、お忙しい中、シンポジウムに参加頂きありがとうございました。

児島の海岸の生物多様性 ～指標生物を用いた分析～

岡山県立倉敷古城池高等学校 普通科3年生 高田希颯 住井琉真 佐藤力

動機

『生物の多様性と干潟の浄化作用』を生物の授業で習い、近くの海の生物多様性に興味を持ったため通生港の海岸で調査しようと考えた。

仮説

通生海岸では近くに港や民家、コンビニがある。また、下津井での埋め立ても進んでいるため、水はきれいではなく生物の多様性は低いと考えた。

研究方法

1. 『瀬戸内海の海岸生物調査マニュアル』からの指標生物の調査シートを使った生物環境の調査
指標生物をもとに生物量を4段階に評価



2. 実験1の生物環境をもとに水のきれいさを調査
指標生物ごとの指標点数で計算

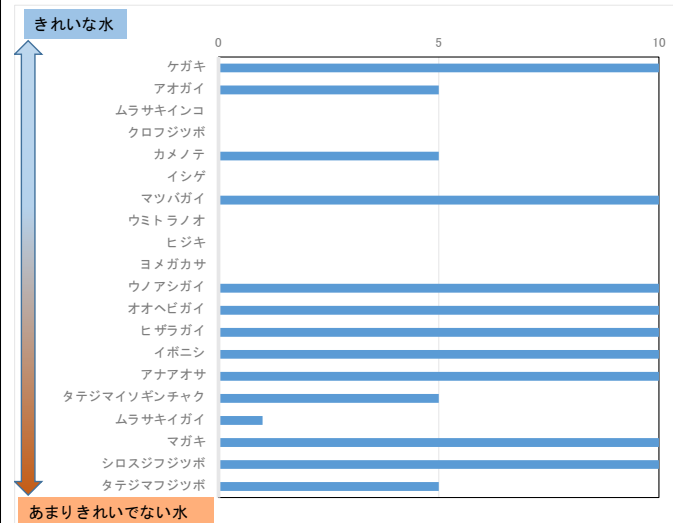
3. パックテスト®を用いて水のきれいさを調べ
実験2と比較

(アンモニア リン酸 有機物)

結果

10点：よく見られる 5点：やや多い

1. 生物調査の結果 1点：わずかに生息 0点：未確認



2. 生物環境をもとにした水質調査の結果

「やや汚れた海」という結果になった

3. 水質パックテスト

アンモニア、有機物、リン酸のいずれもほとんど
検出されなかった

場所	アンモニア	リン酸	化学的酸素要求量
潮だまり	0.2	0	0

考察

通生海岸で水のきれいなところを好む生物とあまりきれいでないところを好む生物が共存していたのは、潮の変化などの影響によりそれぞれに適した環境が作られていてと考えられる。

結論

水質の良さと生物多様性は必ずしも関係しているとは限らない。通生海岸は、ほかの海岸ではめったに見られないほどの多様な生物が生息していた。

発見

全国で絶滅危惧種Ⅱ類に岡山県内では絶滅危惧種Ⅰ類分類される「ツバサゴカイ」発見
鹿児島大学に同定を依頼



参考文献

「瀬戸内海の海岸生物調査マニュアル」
瀬戸内海環境保全会議 (平成26年3月)
株式会社共立理化学研究所パックテスト®

第2回 高梁川とその支流をつなぐ 高校生流域交流会

テーマ『つながり』

岡山県、広島県にまたがり広域を流れる高梁川水系。流域を一つの地域として捉え、上流から下流までを流域の高校生たちを中心につなぎます。



日時：令和3年 **11**月**7**日(日)
13:00 ~ 16:00

会場：Zoomを利用したオンライン

対象：高梁川流域に住んでいるか通っている高校生、中学生
大学生または、本会の趣旨（裏面）に賛同できる方

参加方法：裏面のQRコードから参加申込を行ってください

主催：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム（事務局：みずしま財団）

共催：NPO法人 nina 神石高原

後援：一般社団法人高梁川流域学校、広島県立油木高等学校魅力化+プロジェクト（申請中）

協力：中国環境パートナーシップオフィス（EPO ちゅうごく）・中国地方ESD活動支援センター

高校生流域交流会

Takahashi river basin Meeting by high school students

○日 時：令和 3 年 11 月 7 日（日）13：00～16：00

○趣 旨：本会では『流域』という地域に着目し、上流部から下流部までを高校を中心につなぎます。流域の高校生による活動を通して自然、文化、資源などの情報を高校生同士が共有し、高梁川全体をあきらかにしていきながら、生徒同士や中学生、大学生、社会との交流を通して多様性や Global 意識の向上に寄与することを期待しています。第 2 回目である今回は『つながり』をテーマとして開催いたします。

○当日のプログラム

- ・アイスブレイク
- ・ゲストによる話題提供
- ・流域交流会
- ・流域の情報共有（活動発表：古城池高校、倉敷南高校、油木高校）
- ・活動を推進するための次の 1 歩を考えるワークショップ

※プログラム内容は変更となる場合があります。

ゲスト Guests

田賀 辰也 さん TAGA Tatsuya

元岡山県公立高等学校教員。小田川、倉敷川、八間川など、地域の方と一緒に水辺の環境や生き物の現状について体験する活動の場で講師を務めてきた。2019 年に小田川流域の魚類や漁労文化をまとめた冊子を自費出版している。

大学生のみなさん

参加方法・お問い合わせ Joining & Contact

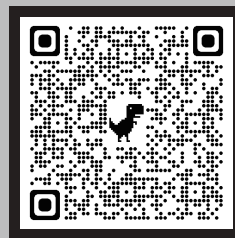
○参加方法

右の QR コードまたは以下の URL より参加申し込みを行ってください。

URL：https://bit.ly/3uB53e6

折り返し、事務局より Zoom のアドレスをお送りいたします。

※締切 11月5日（金）23:59



○お問い合わせ

nina 神石高原 担当：伊藤

Tell：0847-82-0288

Mail：takahashiriver.meeting@gmail.com

みずしま財団

または Tell：086-440-0121

Mail：webmaster@mizushima-f.or.jp

※みずしま滞在型環境学習コンソーシアムとは…

岡山県倉敷市水島を中心とする高梁川流域で、市民・企業・行政・大学等教育機関などのパートナーシップによって、地域はもとより世界の子どもや若者たちに滞在型を含めた環境学習プログラムを展開しています。学びを通じて、地域で働き、暮らすことへの誇りと情熱に溢れ、持続可能な社会の担い手となる人材を育成するとともに、「世界一の環境学習のまち みずしま」の創造を目指します。

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム 設立宣言

全国で地方創生の取組みが進むなか、高梁川流域では、昭和29年に大原總一郎氏らによって設立された高梁川流域連盟の理念を礎として、時あたかも、倉敷市が高梁川流域中枢拠点都市となり、流域圏の七市三町に暮らす隣人たちが手を携えて、地域の明るい未来を創るために産官学民が連携して多様な活動を展開しています。

また、市民活動の視座からは、平成15年から流域の環境教育を中心に活動が続けるGREEN DAYの成果を反映して、平成27年度に(一社)高梁川流域学校が、さらに、平成25年度には水島で「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会」が設立されました。

そして、平成28年度には、倉敷でのG7教育大臣会合を契機に、ローカルサミットin倉敷おかやまが開催され、国内外を問わず高梁川流域での取り組みに注目が集まり、この潮流に呼応して、高梁川流域の市民・企業・行政・大学などが一堂に会したシンポジウム「世界一の環境学習のまち みずしまを目指して」において、滞在型環境学習プログラムが提案されたところです。

こうした高梁川と瀬戸内海が育んできた水島の豊かな自然や環境、歴史・文化・風土、暮らしや水と命、そして企業活動が生み出す英知を結集し、また、倉敷が日本遺産に登録された時宜を得た地方創生への気運の高まりを活かして、本格的な滞在型環境学習プログラムを企画・実施することにより、地域はもとより世界の子供や若者たちに、人類と自然が織り成す地域社会の素晴らしさを伝え、世界一の環境学習のまち“みずしま”の創造をめざします。

本年3月、地域で働き、暮らすことへの誇りと情熱に溢れる次世代人材を育成するために「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」の設立により本格的な活動を展開します。

持続可能社会の未来をみつめ、高梁川流域を守り育てる活動を展開しておられる皆様方のご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

2018年3月
発起人代表 萩原 邦章



目的

高梁川流域において、持続可能な地域づくりを担う人材を育成する

- ・今後ますます増加が見込まれるASEAN・中国等からの留学生の学びのフィールド
- ・地域で生まれ育つ子どもが、地域の自然・文化・暮らしに触れ、地域への愛着を持つ

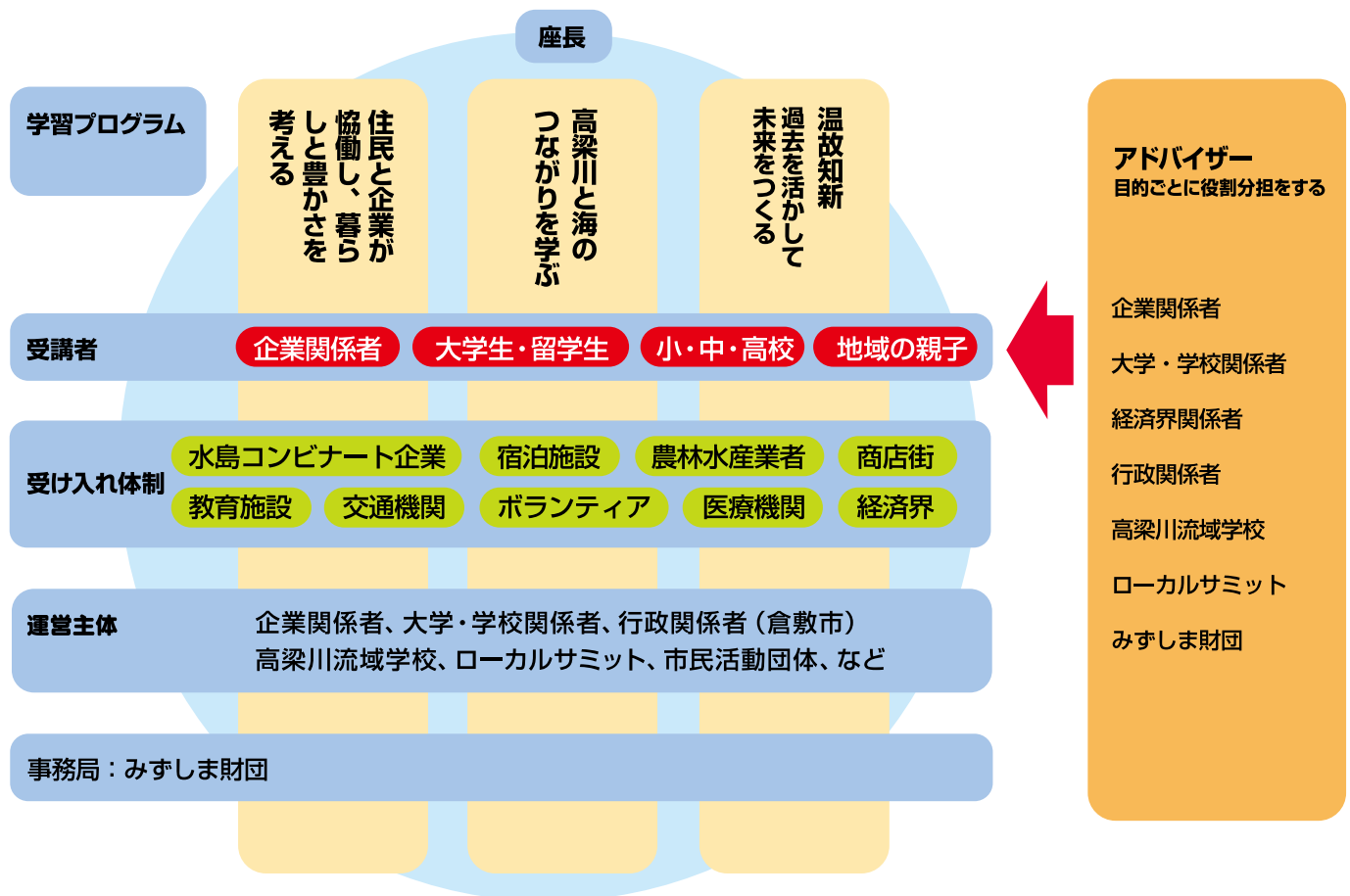
⇒ 地域社会の持続可能性の発見

⇒ 地域を愛し、地域に根づく人材を育成

G7倉敷教育大臣会合「倉敷宣言」の具現化、
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標 (SDGs)」との関連
経済成長・社会的包摂・環境保護の3つの主要素の調和

イノベーション創出と暮らしや自然環境が調和する未来社会の実現に向けた英知と努力を世界の人々が学ぶ
高梁川流域と瀬戸内海の自然、文化、暮らしに直接触れる滞在体験型学習を通じて地域社会の持続可能性を
発見未来を担う若者たちの思いを込めた流域のビジョンづくり

みずしま滞在型環境学習コンソーシアム



発起人代表	萩原 邦章	萩原工業(株) 代表取締役会長・(一社)岡山経済同友会 顧問
発起人	伊東 香織	倉敷市 市長
	井上 峰一	倉敷商工会議所会頭・株式会社いのうえ 代表取締役社長 学校法人 関西学園 関西高等学校 理事長
	大久保憲作	(一社)高梁川流域学校 代表理事・(一社)岡山経済同友会 監事 倉敷木材(株) 代表取締役会長
	梶谷 俊介	ローカルサミットin倉敷 実行委員長 (一社)岡山経済同友会 理事(地域振興委員長) 岡山トヨタ(株) 代表取締役社長
	楨野 博史	岡山大学 学長
	岡 浩二	水島の未来を考える会 会長
	尾崎 浩子	水島おかみさん会 会長
	古川 明	(一社)高梁川流域学校 理事・前新水マリン株式会社 代表取締役社長
委員関係・事務局	吉田 淳一	萩原工業(株) 取締役執行役員事業支援部門長兼総務部長
	坂本 万明	倉敷商工会議所 倉敷未来プロジェクト委員
	高橋 香代	岡山大学理事(総務・評価・企画担当)・副学長
	三村 聡	岡山大学地域総合研究センター センター長・教授
	太田 映知	(公財)みずしま財団
	藤原 園子	(公財)みずしま財団 事務局長
	塩飽 敏史	(公財)みずしま財団 理事・(一社)高梁川流域学校 監事
オブザーバー	西村 仁志	広島修道大学 人間環境学部教授

2018年3月時点



みずしま滞在型環境学習コンソーシアム活動報告書
2021 年度

発行日：2022 年（令和 4 年）3 月

発行者：みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

事務局：公益財団法人水島地域環境再生財団（みずしま財団）

連絡先：〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町 13-23

tel：086-440-0121 fax：086-446-4620

E-mail：webmaster@mizushima-f.or.jp



みずしま滞在型環境学習コンソーシアム